

鷺宮地域ニュース 374号 サッカー国際審判員：山下良美さんインタビュー 全文紹介

1月16日(月) 10:30~12:00 鷺宮小学校・校長室で実施

山下良美さん：サッカー国際審判員（プロフェッショナルレフリー）

中野区立鷺宮小学校・中野区立第八中学校・都立西高校・東京学芸大学



2012年女子1級審判員取得

2015年日本サッカー協会（JFA）の推薦により、国際サッカー連盟（FIFA）の国際審判に登録

2019年1級審判員取得

2021年Jリーグ史上初めての女性主審となる

2022年FIFAワールドカップ史上初めて女性主審のひとりとして選ばれ、唯一の日本人審判員としてカタール大会に参加

2023年FIFA女子ワールドカップにおいて主審として選ばれる

7月にオーストラリアで開催されるので、山下さんの世界での活躍を応援しましょう！

インタビュー担当：安田優花さん（ゴールキーパー）・岩井萌那さん（ディフェンダー）

十文字高校サッカー部3年生（若宮サッカー少年団「わかみやミストラル」・中野区立西中野小学校卒）

十文字高校サッカー部の令和4年度成績は、夏の全国インターハイ準優勝、クラブチームとの全国決定戦「ファイナルス」準優勝、2022年12月30日~1月8日開催の高校女子サッカー選手権大会準優勝。

1月8日に行われた選手権大会決勝戦は、TBS民放で放送され、たくさんの方が見てくださったと思います。



岩井萌那さん

山下良美さん

安田優花さん



【開始前の雑談】

高橋校長先生：ポジションはどこでした？

安田さん：中学～高校の6年間、あと小学校6年間も含めずっとゴールキーパーで、今回の大会も背番号16番をもらってベンチに入らせてもらいました。

高橋校長先生：背番号もらうこと自体が大変なんでしょう。

岩井さん：私はおもにバックラインで、センターバックやサイドバックです。背番号はもらっていたのですが、どちらかという応援の方にまわっている感じでした。

安田さん：岩井さんは、メンバー登録の30名の中には入っていて、チームの中でキャプテンとか幹部とかあるのですが、その幹部として全体をまとめる重要なポジションで活躍されていました。

高橋校長先生：いろいろなかわり方があって、同じチームで練習はしていても、そういうのが大切なんだと思います。私の息子も高校で野球をやっていましたが、1度だけ背番号をもらったのですが、後はもらえずに応援に回ってました。出る人もそうだし、それを支える人もいて、そういうことがあって活躍できるのかな～といつも思っています。

事務局：十文字高校は全国で2番目の部員数で、今一番多いのは山梨県の日本航空高校で80名近くいて、十文字高校サッカー部の今の部員数は75名です。

山下さん：その中で登録メンバーに入るというのはとても大変ですよ。しかも十文字高校は文武両道で本当にすごいと思います。

実は、今の十文字高校サッカー部監督の石山先生から電話をもらって、十文字高校に来ないかとお誘いを受けたこともありまして、ちょうど十文字高校がまだ一人ぐらいしか部員がいない頃で、来て欲しい、けど何もできないけど、とおっしゃっていました。そんな関係もあり、サッカーの会場でお会いすると石山先生はいつもお声をかけてくださいます。

十文字中学校にも2人ぐらいしかサッカーをやる方がいない時で、一緒に合同で試合に出させてもらったりと、そのころはまだ東京でも女子のサッカーはそんなに盛り上がってない頃でした。

そんなこともあり、今回の選手権の十文字高校の試合も、見れるものは全てテレビ等で見ました。



【インタビュー開始】

安田さん：自分たちも審判4級を持っているのですが、山下さんが国際的な審判になられた経緯を教えてくださいませんか？

山下さん：私もチームで取らないといけないということで4級の資格は持っていたのですが、4級から3級、2級、女子1級、1級と取得し、女子1級の時に国際審判員になったのですが、3級になったのは本当に先輩に騙されてというか、3級になれば更新が楽になるよと、4級だと自分で更新をしないといけないので忘れてしまったりすると自分からまた取りに行かないといけないけど、3級は更新時には協会からお知らせが来て、それに応えていけばいいから楽だぞ、と言われたんです。

3級の取得の時には、私の時にはクーパー（クーパー走テストの事）を走ったのですが、先輩からは、たくさん走れば拍手をされるからとりあえず3,000m走ってれば大丈夫と言われ、3,000mいくつかを走ったのですが、やはり拍手をされ、そこからはたくさん声をかけてくれる人がいました。そのころは女性審判員も少なかったので、そうやって持ち上げられてきた気がします。

2級になると、当時は、なでしこリーグの副審が出来るようになるんですが、その時はまだ私もサッカーチームに所属していて、土日のチームの試合と、2級取得試験日がだいたい重なってしまうので、サッカーを休むのが嫌で、2級取得は断っていたのですが、ふとした日に、自分のチームの試合と重ならない日があり、それで2級を取得しました。2級を取得すると、なでしこリーグの副審をできるようになり、そうすると少し気持ちが変わってきて、やはり日本の女子のトップリーグに関わるようになると、小さい頃から私もずっとサッカーをやってきたので、トップリーグに関われる喜びを感じ、サッカーの発展に審判としてなら貢献できるかもしれないと、貢献したいと思うようになり、そこから真剣に審判員という活動に向き合うようになり、次はやはり女子1級を目指し、そして1級審判員を目指すようになりました。昔からもともと私は、上を目指すというか、この試合で吹きたいとか、この大会で吹きたいとか、そういうことを目指すタイプではないのですが、とは言ってもうまくなりたいという思いはあり、その先にあったのが国際審判員ということです。お話しいただいた時は、JFAから推薦をいただいたのですが、そんな国際審判員になれるのならお願いしますということで、国際審判員になりました。



安田さん：私たちが先日出場した高校女子サッカー選手権大会でも女性審判が多くて、決勝も全て女性審判員だったのですが、女性審判の活動についてお話をお聞かせください。

山下さん：もともと、なでしこリーグも、女子のトップリーグでさえも、全員女子の審判員ではなかったですが、関東は女子審判員の数が多いので全て女子審判員でまかなえるのですが、地方の方だと、副審は男性審判員だったりして、すべてが女子の審判員ではなかったりしていて、でも今 We リーグ（女子のプロサッカーリーグ）は全部女子審判員でやっていて、まあ、それはそうだよねと思うのですが、今は女性審判員の数も増えてきて、もう当たり前という感覚になっていると思います。

安田さん：審判をやっていると、やはり批判されることが多いと思うのですが、自分たちも副審をやっているいろいろといわれるので、何か嫌になるというか、あまり進んで審判をやりたいと思うことが私はあまりないのですが、批判された時など何か嫌になることなどはないですか？

山下さん：もともと私も審判員をやりたいなくて、別にわざわざやる必要ないというか、嫌な思いしかしなし、楽しいっていうイメージはないし、実際、今も、審判って楽しいなあ、と思ってやっている時間というのは特になくて、でも審判員になる前からそれはわかっていたので、何か判定に対して文句など言われても、まあそれはわかっていたことなので、もうやめたいなあ、と思うこともないですね。審判員になる前にその覚悟はできていたので、そこにギャップはなかったのですが、でもそれ以外の魅力というのが大きくて、いちばん初めに審判を始めた時は、選手と同じようにフィールドを駆けまわって、ボールを追いかけて、フィールドに立てるという幸せでやっていたのですが、続けているうちに魅力が今でもどんどん多くなっていて、特に人との出会いが大きくて、今日も十文字高校サッカー部のおふたりとお会いできたのですが、本当にいろんな人と出会えて、選手もそうですが、チームスタッフとか、どちらかというサッカーを支えている側の人たちとお話しできたり、お会いすることが多くて、それがすごく魅力的です。他にもいっぱいあるのですが、それがどんどん積み重なって行って、楽しいとか、楽しくないとか、言われて嫌なことがあるとか、それ以上にそっちの魅力が今、勝っていて、そういうことを思っている、それで嫌にならないし、それ以上に向上しようという気持ちに変わっていく感じです。

安田さん：学んだことや、この試合は心に残って印象的だったなあ、というものはありますか？

山下さん：学んだこととして、自分の生き方とかにつながっているのかなと思ったのは、審判はミスをしてでも取り返しがつかないんですよ。このファールを吹けなくて、じゃあこっちのファールを吹こうとか、そういうことは出来なくて、もうミスしたらそこで取り返せない、ひとつひとつに本当に丁寧に誠実に一個一個に向き合っていないといけないんです。今まででもそうじゃないといけないのですが、審判になってより気付かされたことで、私は目の前の事しか集中できないのですが、正直ネガティブなところからきていて、上の目標を立てるとこんなことしないといけないとか、それはちょっと難しいなあとか、ネガティブな考えから目の前の事だけを見ているという感じでした。でも審判員としてひとつひとつに向き合って誠実に対応するというのは、生き方に通じている気がして、それは審判員をやって知ることが出来て良かったなと、学んだ大きなことだな、と思います。

印象的な試合は、2015年に皇后杯の決勝戦を担当したんですが、ちょうど澤選手が引退する試合で、本当にたくさんの方が会場に見に来てくださっていて、テレビでもたくさんの方が見てくださって、本当に人が少ない、女子サッカーに関わる人たちが少ないところからサッカーを始めていたので、こんなになったんだと、こんなに人を惹き付けられるものなんだと、女子サッカーの力みたいなのを、それをフィールドから見渡して、その力を感じたような気がして、その試合はとても印象に残っています。



岩井さん：ワールドカップに女性審判員として参加されたと思いますが、その感想やそこで見てすごいな、と感じたことを教えてください。

山下さん：ワールドカップはやっぱり自分自身が意識していたのもあるのですが、フィールドに足を踏み入れた時に、自分の持っている感覚全てが鋭くなったような、会場では火が上がってその熱さを感じ、フィールド上はクーラーで結構寒いんですが、その寒さも感じ、何か振動が体の内側まで届いてきて、選手の気迫も感じ、もちろん声とか音とか、全部を全身のすべてでそれを味わっているという感覚になり、こんな感覚をサッカーという場所で味わえるんだという、決勝戦はテレビで見てたんですが、決勝戦も含め、見ている人たちの本当に心が動く姿みたいなもの、泣いたり笑ったり叫んだり悔しかったり悲しかったり、サッカーで心動かされる姿を見て、あらためてサッカーの魅力というものを感じました。サッカーの魅力は何ですか？と聞かれてもいつも答えられなかったんですが、ああ、これがサッカーの魅力なんだというものを肌で感じる事が出来て、頭ではわかっていたけど、ワールドカップでそれを感じられたんですね。私はこれがサッカーの審判員の魅力だと思うんですけど、サッカーの審判員ってサッカーの魅力を最大限に引き出すという目標があるんです。サッカーの審判員がかかっている目標がそういう目標なんですけど、それってこんな魅了を引き出す役割なんだと、それを求められる審判員って役割は何てすごいんだと、何て魅力的なんだと、その魅力にあらためてワールドカップという場所に立って気付けた事がいちばんの印象的で良かったところです。

女性審判員としては全部で6人、主審、副審合わせて参加したんですが、私はあまり女性審判員ということ意識してなかったのですが、現地に行って、カタールという場所で、どちらかというとな女性の行きづらい国で、ホテルで滞在中に、一般の人から、名前を呼ばれて「応援しています」と声をかけられることが多くて、それがみんなカタールに住む女性の方たちが多くて、そんな人たちが知っていて声をかけてくれるということで、よくいうジェンダー平等とか女性活躍とか、そういうのってカタールでやることって意味があるんだと、そこでやっと意識しました。私以外の5人の女性審判員が、例えばインタビューを受けているとか、話しをしているのを聞いたりすると、本当に良く考えていて、自分の立場っていうか、女性審判員として参加するっていうことに対する考えをしっかりと持っていて、これは私も意識して考えないといけないな、と思ってから、より考えるようになりました。こういう機会が広がるっていうことが大切だということに、私がかかってないことに気付かされて、自分では分かってなかったけれど、いろんな人からお話をもらって、その意義とか意味とか考えさせられて、今もまだ、私もこういう立場になって言ったりしたりすることが、何かもしかしたら誰かの何かにつながるかもしれないんだな、と意識して話したりするようになりました。



岩井さん：鷺宮小学校や第八中学校で過ごして、その中で思い出に残った行事とか、たくさん楽しかったことなど覚えていらっしゃいますか？

山下さん：ここ鷺宮小学校での思い出って、サッカーした思い出しかなくて、中休みに小さいボールを持って、走って、1分、1秒逃さずにサッカーするぞっ！と、中休みに外に行ってサッカーして、学校の授業が終わると、今度は大きいボールで、本当に暗くなるまでサッカーをしていたという思い出しかないです。

高橋校長先生：これが山下さんが卒業した時のアルバムです。サッカークラブの写真に写っていますね。文集が付いてなかったので、写真だけなんですけど、

山下さん：サッカーした覚えしかないんですが、、あっ、あと登り棒は登れないという思い出です。その当時と変わらないんですね、あれだけは苦手だったなという思い出しかないんです（笑）。



鷺宮小学校 6年生の
山下良美さん



安田さん：鷺宮の地域でサッカークラブに入ってたんですけど、自分たちはわかみやミストラルで、そのころは女子のチーム・わかみやミストラスはなかったと思うのですが、そこでの思い出とか、どこに所属していたとか、その時期のお話を聞かせてもらえますか？

山下さん：私は、若宮幼稚園のチャンピオン体育スポーツクラブという体操クラブとサッカークラブに所属していて、それは兄がサッカーをやっていたというよくある理由でサッカーを始めたんですが、そのチャンピオン体育スポーツクラブがWSC レグルスというサッカークラブで、男の子しかいなかったんですが、そこに、同じ団体だったので、そのまま所属してサッカーをやっていました。確か3～4年生の時は、もうわかみやミストラスはあって、試合だけ、さわやか杯とかにだけ出させてもらって、5～6年生の時にわかみやミストラルに所属するようになって、WSC レグルスにも所属していたのですが、行ける時とか試合の時には行かせてもらって、本当に珍しいですよ、女子のチームがあるということが、だから近くにあってラッキーだなと思って、それで女子の大会に出たおかげで、他のチームとのつながりが出来て、友達が出来て、そのまま中学校で新しく出来るチームに他のチームの友達と一緒に入ったりして、今あるのかな、高島平とかハヤブサとか、その辺の人たちと一緒に中学のクラブチームに入っていました。

若宮幼稚園の時に、幼稚園に行くのがすごく嫌で、たぶんお母さんと離れるのが嫌で、泣きわめいて、なかなかいかなかったんですが、それをあやしてくれて何とか幼稚園にとどめてくれたのがそのサッカーのコーチで、そのコーチも含め本当にいい友達にそこで出会って、若宮幼稚園で途中から一緒に女の子が入って来て、一緒にサッカーをするようになって、その子と同じ中学のクラブチームに入ったりして、すごくいい環境、コーチと仲間に出会ったことによって、幼稚園の事はあまり覚えてないのですが、小学校の時に本当にサッカーが好きになって、もうずっとサッカーを続けたい！という思いが小学校の時に生まれていて、そのおかげで今もサッカーに関わっているな、と思っているので、すごく大事な期間でした。

鷺小は、二つチームがあって、WSC レグルスに入るか、鷺宮 SC に入るかで、サッカーやってる子はどちらかに所属しているかでした。

わかみやミストラスってまだ歌って歌っていますか？ ♪わかみやミストラル みんな頑張ってるよ～♪とか。

安田さん：いや～知らないです。(笑)

岩井さん：知らないです。(笑)

山下さん：多分、ひとりの子が勝手に作って勝手に歌っていたんだと思いますが、、、

安田さん：佐々木コーチをご存じですか？

山下さん：あ～。(知ってますということのようです)

安田さん：自分たちは、佐々木コーチの息子さんに、メインコーチとして教わっていたのですが、今も連絡を取ったりしているんですが、山下さんがご存じではと思うコーチはそれぐらいでしょうか。

岩井さん：あとは安田代表ぐらいでしょうか？

山下さん：安田代表というのは、えーっと、えーっと、安田さんのお父さん？

安田さん：いや全然関係ない安田なんです。

山下さん：いやいや、えーっと、あの、、別の「安田さん」の事を聞いています、レッズの安田さんです！

岩井さん：あ～、それは若宮サッカー少年団の代表・安田さんの娘さんで、安田有希さんです！

山下さん：(レッズの) 安田有希さんとは、わかみやミストラルで出会って、そこから他に、ここに行ったよ、とかは知っていて、レッズの試合で私が審判をして、一緒にフィールドに立ったことがすごくうれしくて、その安田代表(安田有希さんのお父さん)が観客席から大きな声で「お～い！」と名前を呼んでくれたりして、すごくうれしかったです。



安田さん：先ほどコーチとかに会ったとかお話があったと思うのですが、印象的な先生とか、地域で覚えている尊敬している方とかいらっしゃいますか？

山下さん：あー、それは難しいですね、。あれですか、答えなきゃいけない方とかいらっしゃるんですかね？(笑)

全員：いやいや、そんな方はないです！

山下さん：でもサッカーで出会ったコーチは本当に覚えていて、スキー教室に行ったりもしていたのですが、そこに所属していること自体で本当に楽しく入れたのが、そのコーチや仲間のおかげですし、コーチにもそれぞれ魅力的な部分があって、すごいテクニックがあっていっぱいフティングの技を教えてくださいとか、すごくお話してくれるコーチとか、それぞれがすごくいい感じでした。何かは覚えているのですが、この人が特別ということはないですね。

岩井さん：先生とかではなく、選手で何かすごくいい選手だな、と思う方はいますか？

山下さん：私、この選手がどうかはないのですが、審判をやったことで知ることが出来たと思うのは、宮間あや選手が試合中に「邪魔！」と言ったんですが、審判ってよく「邪魔！」って言われるんですが、審判って邪魔だから分かるんですが、宮間選手が「邪魔！」っていうタイミングがちょっと他の選手と違って、私としては宮間選手の前を通り過ぎるのはまだまだ余裕で間に合うと思って通り過ぎたんですが、宮間選手としてはきっとイメージが出来上がっているようで、ここからパスが来てここにパスを出すぞみたいな、このタイミングでここを見たい、というイメージがあって、私はそのタイミングで通ったことで壊してしまったようで「邪魔！」って言われたみたいなんですけど、何かちょっと考え方が違うというか、見えてるものが違うんだな、と思って、これがこの選手のすごさなんだなとその時に気付きました。これは審判員としての特権だな、と気付いたりしました。(笑)



安田さん：最後に、鷺宮地域の子どもたちにメッセージをお願いします。

山下さん：私は、もともと始めたのが、やりたいやりたいと思って審判を始めたわけではなくて、本当に最初のきっかけは、本当に無理やり連れていかれて審判をしたというのがきっかけなんですけど、とは言ってもやってみようと思って一緒についていったので、そのやってみるということがなければ、今こうやって審判員として活動がなかったんだなと思うと、その一歩、嫌なイメージはあったものの、やってみるものの大きさということに気付いて、やってみることに、挑戦というほどすごいことではなくて、とりあえずやってみるということを伝えたいなと思っています。やってみることで本当に世界が変わるかもしれない、本当に小さい事でもいいので、例えば食べたことのない食べ物、見た目の悪い食べ物で食べたくないな～と思う時に、ちょっとでも食べようかな～という気持ちが、迷いがあるようならぜひ食べてみてもらいたいです。たとえそれが本当にまずくても、それに気付くことが出来るし、これをもしかしたら好きな人もいるかもしれないと、とにかく何かが起こる気がするので、やってみるということをお勧めすることを私は伝えたいなと思います。

安田さん・岩井さん：ありがとうございます！

【その後、歓談の中で】

事務局：審判員を目指したいという方が山下さんを見て出てくるのではないかと思います、審判員を目指したい方に何かメッセージがありますか？

山下さん：審判員を目指したいという方は、本当に素晴らしいので、そんなにいないので、ぜひ始めて欲しいですね。特別なスキルとか、特別これが必要とか特にないので、言ってみれば誰でも始められるので、サッカーをやってなかった人もけっこういるんですよ。

審判員で意外とすごく大事なのが、練習試合とかで選手も副審をやったりすると思うのですが、副審の判定って本当に大事で、練習試合で本当にきわどいタイミングでオフサイド飛び出したりして、でもそれを正しく練習試合で判定されてないと、ディフェンスラインも正しい判定もわからないし、本当はオフサイドではないのにオフサイドっていう判定が出たことで、実際の試合ではミスが、オフサイドだと思って止まってしまったりとか、カバーが上手くいかないとか、オフENSの方も、せっかくきわどいタイミングでめちゃくちゃいい飛び出しをしているのにオフサイドという判定が練習試合で出してしまうと、本当はいいプレーなのにそれをやらなくなってしまうので、本当に練習試合とか、地域とかでやってる審判員って意外と大事です。なので、そういうところでの判定というのが、そういう人たちが、ちょっとやっている審判員の方がサッカーを支えているので、すごく直接的につながっているんですよ、トップの日本のサッカーと。ですので、それをやっている人たちはぜひ責任と共にやって欲しいです。

なので、いろんな地域とかで、鷺宮でやってる審判もすごく大事なもので、それだけ意味のあるものだと、すごくつながっているぞ、と思ってやっていただき、すごく大事だぞと伝えたいです。その判定ひとつで、スター選手が、日本をしょって立つ選手が生まれるかもしれませんので。



高橋校長先生：審判の更新のために体力テストがあると思いますが、それがかなり厳しいというか、ある程度体力が必要で、上に行けば行くほど求められる身体能力が違ってくるのではないのでしょうか。

山下さん：私は今、1級審判員なので、ちょうど更新があって私もテストを受けた後なんですけど、やっぱりそれを満たさないと1年間何もできないので、それは最低限クリアしないといけないもので、とは言ってもどんな状況の中でもクリアしないといけないので、日にちが決められていて、どんな体調でも、どんな状況でもクリア出来るトレーニングを日々しなきゃいけないのは大変ですが、試合をするにはそれだけ必要なので、やらなきゃいけないことではあります。

事務局：山下さん自身は、審判ではなく、サッカーをプレイする、楽しむ機会というのはあるのですか？

山下さん：怪我をする可能性があり、あまり良いとされていないので言えてないのですが、コロナが始まる前まではしっかり練習に参加していました。コロナの影響で、団体活動はあまり良くないと考え、そこからは行けなくなりました。公式的には2013年ぐらいでやめていることになっています。

事務局：審判もやっておられたけど、プレーの方も、両方ずっと続けていらっしたんですね。

山下さん：私はプレーするのが好きなので。

高橋校長先生：ずっと続けられていたってすごいですね。優勝とか準優勝とか、ピークを迎えてしまって、先に続かない。教員でも行った先でチームを作って、多摩に行けばそこでチームを作って、島に移動になったらまたそこでチームを作って、全国大会に出場している教員だったんですが、でも受け皿がなかった時代だったのと、そこで完成しちゃうと終わってしまう。本当にサッカー好きでずっと続けられるとか、野球でも何でもいいですが、ある程度生涯にわたってスポーツと関わるといいのかなと。山下さんも、今も選手で、機会があればサッカーを続けられたいと。



加藤広報部長：言葉なんですけど、審判されていると、いろんな国の方との試合があって、いろんなクレームとかあると思うのですが、そういうのは態度で分かるんですか？

山下さん：基本的には、みんな話しかけてくる時は英語で話しかけてくるんで、また審判同士も英語で話すので問題ないのですが、選手も話しかけたい時は英語で話しかけてきます。

加藤広報部長：それは決まりみたいなものがあるんですか？

山下さん：何か英語で話せば伝わるといのが浸透しているのかもしれないですが、でも基本的に別に言葉が伝わらなくても、笛と態度とジェスチャーで伝わりますし、例えば日本語で「ダメですよ！」と言っても伝えることは伝わるので、伝わればなんでもいいのかなと、たぶん言ってくる方も不満なんかもそれぞれの言語で言っても伝わっているのかな、と。

事務局：選手によっては、熱くなりすぎて、いろんな言語で投げ捨てたりとか、例えば侮辱する言葉を言ったりとかすることもあるのではないですか？

山下さん：はい、ありますね。審判の中には侮辱する言葉など、イエローカードやレッドカードに値する言葉を覚える方もいらっしやるんですが、私はあまり覚えてない方です。

加藤広報部長：今日、高校生のおふたりに会って初めて聞いたんですが、グリーンカードというのがあるようですが、山下さんはこのグリーンカードを出されたことがあるんですか？

山下さん：いえ、基本的にグリーンカードは小学生以下で出すもので、リスペクトあふれる相手を思いやる態度が見えた時に提示するんですが、審判が持っている唯一良いカードですね。

事務局：小学生の試合で審判をやりたいとか、どうですか？

山下さん：今、小学校のU12の大会は、だいたいユース審判員が担当していて、高校生が活躍する場という感じがあります。

高橋校長先生：3年生の児童で、夏休みに自主制作をした動画があり、鷺宮小学校出身の国際審判員：山下さんのことをとりあげ、ニュース放送仕立てに作成していたのですが、ぜひ山下さんにも見ていただきたいと、協会（JFA）へその動画を送ったんですが、ご覧になっていますか？

山下さん：はい。ちょうどワールドカップ開催中でしたが、カタールのホテルで拝見させていただきました。そのお礼に、その動画を作ってくれたおふたりにお手紙を書きました。

高橋校長先生：えっ、お手紙を書いてきてくださったんですか！

せっかくなので、直接その3年生児童2人にお渡しいただけるとうれしいです。

今、授業中ですが、少しの時間だけ、ここ（校長室）に来てもらいますね。



◎3年生2人が校長室に来て、山下さんから直接お礼のお手紙をいただき、ノートにサインをしてもらい、教室へ戻っていきました。突然、憧れの山下さんにお会いできて、感動している様子でした！

「ぜひ来年度、鷺宮小学校に来てお話を聞かせてください。」とメッセージを山下さんへ伝えていました。



その後、山下さんと写真撮影。

高橋校長先生も大木副校長先生も、今日のようなお話を鷺宮小学校の全児童にぜひ聞かせたいとお伝えし、鷺宮小学校最後の1年となる令和5年度は、山下さんの来校をお待ちしています！とお伝えしました。



鷺宮区民活動センター運営委員会からも、山下さんを中心に、地域のみなさんが広く参加できるサッカー教室やサッカー大会などを開催できるとうれしいので、その時はぜひともよろしく願います、とお伝えし、インタビューを終えました！

